

【D. 取組推進の拠り所の創出】の技術項目

10. 組織の承認

- | | |
|------|--|
| (32) | 課全体の取り組みとして位置づけられるように、上司や課内の理解・協力・評価を得る |
| (33) | 行政全体の施策の中に、取り組んでいる事業を位置づけて実施することで、活動推進を円滑にする |
| (34) | 地域全体の取り組みとして位置づけられるように外部協力機関の理解・協力・評価を得る |
| (35) | 活動の必要性や成果を資料化し、上司や関係者の理解を得ることにより、予算を獲得する |

事例10：思春期セミナーの次年度計画を検討している佐々木保健師の話

(事例10－1)

佐々木保健師は、思春期セミナーの担当になり3年目になる。この事業はすでに10年以上継続している。例年、依頼のあった中学校に出向き、助産師会の協力も得て性教育やエイズ教育に関する講演会を実施している。講演会後は受講した中学生に毎回アンケートをとっており、そこからは、受講した中学生の性行動や性感染症への関心や理解の深まりが効果として確認できている。しかしながら、中学校の教員がこの講演会の意義や目的、効果についてどのように認識しているのか、ほとんど把握できていない。講演会の開催後に、自分たちで性教育等に取り組んだという報告を聞いたことはこれまでない。佐々木保健師は、この事業のねらいは「学校が主体的に思春期教育を実施できるようになる」となっているのに、まったくこの目標を達成していないと感じた。このまま同じやり方で続けていてもいいのだろうかと悩んでいた。同僚の保健師に相談してみると、「特に問題が起こっているわけでもないし、変える必要はないよ。」と言われ、本当にそれでいいのかなと思った。

【設問 10－1】佐々木保健師の立場から

あなたは、上記の4項目のどの項目を意識して、どのような取り組みをしますか？

～回答例：項目（32）を意識して～

佐々木保健師は、10年以上継続しているこの事業について、今やルーチン化し、これまで見直しもされことなく担当者に任されているように感じていた。相談した同僚保健師は変える必要はないと言っているが、他の保健師や上司はこの事業の必要性をどう考えているのだろうかと思った。佐々木保健師は、技術項目（32）「課全体の取り組みとして位置づけられるように、上司や課内の理解・協力・評価を得る」ことを意識し、継続するにしても廃止するにしてもこの事業を課としてどう考えるのか、他の保健師や上司の意見を聞き、事業の位置づけを明確にしたいと考えた。そこで、次回の保健センター業務会議で「思春期セミナーの今後の方向性について」を議題にしてもらえよう、会議の担当者に依頼した。

(事例10－2)

同じ母子保健担当グループのメンバーである佐々木保健師の先輩保健師は、佐々木保健師から、次回の保健センター業務会議で思春期セミナーのことを取り上げてもらえるように頼んだけれども、何か準備したほうがいいかと相談を受けた。先輩保健師は、佐々木保健師の力になりたいと思った。

【設問 10－2】先輩保健師の立場から

先輩保健師は、上記の4項目のどの項目を意識して、佐々木保健師にどのように関わりますか？

～回答例：項目（34）を意識して～

先輩保健師は、保健センター業務会議で、この事業のことを課の保健師全員で理解し今後の方向性を考えるためには、まずは、事業担当者である佐々木保健師自身がこの事業の課題を整理し、他の保健師に説明できるようにしておくことが必要ではないかと思った。先輩保健師は、そのことを佐々木保健師に伝え、一緒に課題を整理することにした。

課題を考えるにあたって、先輩保健師と佐々木保健師は技術項目（34）「**地域全体の取り組みとして位置付けられるように外部協力機関の理解・協力・評価を得る**」を意識し、果たして協力機関である学校側は、この事業のことをどのくらい理解してくれているのだろうかと考えた。佐々木保健師は、講師役を担ってもらっている助産師会とは事業の必要性や取り組み内容を理解しあえていると思えるが、中学校の教員が、理解してくれていると思える発言はほとんど聞かれないように感じていた。多くの学校は、単に「今年も講演会をお願いできますか？」と依頼してくるだけで、どのようにやりたいのか、学校にどのような性に関わる問題があるのかといった内容について学校と保健師の間で話をしていないことに気づいた。学校側は、性教育をやっているという実績があればよいのだろうかと思った。教員自身が、自分の学校で思春期の性の問題に取り組んでいく必要性を認識し、何が課題か考えない限り、主体的な取り組みにはならないと気づいた。そのためには、講演会の企画の段階から一緒に考え、学校のニーズを踏まえた内容にし、実施後の評価も共に実施する必要があると考えた。そうした取り組みの必要性を課題として会議で提案することにした。

(事例10－3)

佐々木保健師が所属する課の課長（保健師）は、保健センター業務会議の担当者から、次回の会議では、「思春期セミナーの今後の方向性」について議題にあげてほしいと佐々木保健師から頼まれていると報告があった。

【設問 10－3】 上司（課長）の立場から

上司として、上記の4項目のどの項目を意識して、保健センター業務会議の話し合いを進めるとよいと考えますか？

～回答例：項目（33）を意識して～

佐々木保健師の上司は、技術項目（33）「行政全体の施策の中に、取り組んでいる事業を位置づけて実施することで、活動推進を円滑にする」ことを意識し、母子保健施策全体を見ながら他の部署や、関係機関が取り組む事業との関わりも踏まえてこの事業の位置づけを明確にし、今後の活動や連携の方針を考える必要があると考えた。丁度、健やか親子21の見直しの時期でもあり、この機会を使って、母子保健の方向性を見据えて本事業の今後を考えられるようなグループワークをやってはどうかと考え、佐々木保健師に意向を聞いてみた。佐々木保健師は、それを聞いてとてもうれしくなり、せっかくなので皆の意見が出やすいようにグループワークは経験年齢別にしてはどうかと提案した。上司は、その意見を取り入れてグループを編成し、佐々木保健師が作成した資料とともにA市の健やか親子21の推進計画、母子保健事業の一覧表を準備し、グループワークを行うこととした。そして、佐々木保健師と同じ母子担当の先輩保健師をグループワークの進行役に任命した。

(事例10－4)

保健センター業務会議では、活発な意見交換が行われた。中学校にとっては、性の問題だけではなく、いじめの問題などもあり、保健センター側の思いだけで性教育をテーマにした講演会を開催しても中学校の教員としては関心が持てないのかもしれない、改めて中学校の教員が認識している課題や関心事を把握する必要があるのではないかといった意見が出た。また、健やか親子21の推進計画も併せてみたことで、市としては、母子保健推進員等にも働きかけて、地域の思春期の課題を把握し、思春期保健対策として今後の方向性を検討する必要もあるのではないかといった意見も出た。

【設問 10－4】 佐々木保健師の立場から

保健センター業務会議を終えて、佐々木保健師として今後の取り組みを上記の4項目を意識して考えてみましょう

～回答例：項目（35）を意識して～

佐々木保健師は、今回の保健センター業務会議で出された意見を踏まえ、次年度は、中学校教員、養護教諭、教育委員会、助産師、小児科医、母子保健推進員等思春期保健に関わる関係者が一同に会す意見交換会を複数回開催し、今のA市の思春期の課題を話し合い、それぞれの立場で何ができるのかを考えてもらおうと思った。

また、中学生とその親を対象に実態調査をやることも必要ではないかと考えた。次年度計画を作成するにあたり、技術項目（35）「活動の必要性や成果を資料化し、上司や関係者の理解を得ることにより、予算を獲得する」ことを意識し、まず、課長に10年間の取り組み経過と実績、現状の課題を整理し、意見交換会および実態調査の必要性を伝えた。課長の理解が得られたことより、新規事業として計画書を作成するとともに、予算も計上した。